

活字をはみだすもの 第15回

「統一する必要はありません」—『白樺叢書 志賀直哉集』の「あとがき」原稿をめぐる

講師 しょうじ たつや 庄司達也

◇開催 11月25日(土) 13:00~14:00

昭和15年に企画・出版された河出書房の『白樺叢書』は、武者小路実篤や有島武郎、里見弴らが選ばれ、全6冊が刊行されました。志賀直哉は、当初は参加を躊躇していたようですが、「自分だけ飲けるわけに行かず」と云って名を連ねました。「あとがき」の入稿原稿や編集者への回答などから、同書出版の裏側を覗いてみましょう。

【講師紹介】 横浜市立大学教授、1961年生。芥川龍之介の〈人〉と〈文学〉を主たる研究テーマとし、出版メディアと作家、読者の関係にも関心を持つ。また、作家が聴いた音楽を蓄音機とSPLレコードで再現するレコード・コンサートなども企画・開催している。



「私小説」を越えて —伊藤整『鳴海仙吉』の挑戦

講師 こうの たつや 河野龍也

◇開催 11月25日(土) 15:00~16:00

伊藤整の長編小説『鳴海仙吉』は、1946年10月から満2年間にわたり各誌に掲載された短篇を再構成し、1950年3月に細川書店から刊行されました。敗戦後を生きる一人の文筆家を主人公に、北海道での疎開生活を描く章や、彼の著作そのもので構成された章など、様々な形式を織り交ぜて「私小説」の幅広い可能性を追求した意欲作です。今回は作中でも特に意義深い「知識階級論」と「終幕」の試行錯誤の痕を直筆原稿から探ります。

【講師紹介】 実践女子大学准教授、1976年生。佐藤春夫を中心に、美術と文学ジャンルの交流や作家の異文化理解に関心がある。



志賀直哉『万暦赤絵』の周辺 —雨宮庸蔵宛書簡から

講師 なかざわ わたる 中澤 弥

◇開催 12月2日(土) 13:00~14:00

昭和8年の9月、志賀直哉は5年ぶりの作品「万暦赤絵」を「中央公論」に発表した。作品の評判は今ひとつであったが、志賀の復活は大きな話題となった。昭和11年には単行本『万暦赤絵』も刊行される。この前後の経緯を、「中央公論」の編集者であった雨宮庸蔵宛の書簡を手がかりにたどっていく。

【講師紹介】 多摩大学准教授、1959年生。1920年代から30年代にかけての文学と諸芸術との交流を研究テーマとする。



戦時下のエトランゼエ —島崎藤村「仏蘭西だより」を読む

講師 おおき しもん 大木志門

◇開催 12月2日(土) 15:00~16:00

大正2年、のち「新生」(大正7年)に告白される姪・こま子との恋愛関係から逃れて島崎藤村はフランスに渡航し、第一次世界大戦勃発で揺れるパリから『東京朝日新聞』に「仏蘭西だより」を送り続けました。その中の最重要部分である「戦争と巴里」(大正3年)の原稿を通して、現地における藤村や日本人文化人たちの群像を追ってみたいと思います。

【講師紹介】 山梨大学准教授、1974年生。徳田秋聲を中心に、自然主義文学・私小説を研究。今回の関連論文に「十五年戦争下の〈文学館運動〉—『文芸懇話会』と『遊就館』、そして島崎藤村」(2015.5「日本近代文学」)、「島崎藤村と『処女地』」(2017.7「日本古書通信」)がある。



※参加費無料 参加ご希望の方は左記 QR コード、または別紙申込書をご覧ください。 (2017.10.23)

八木書店 古書出版部 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1 営業: 10時~18時 定休: 日祝
TEL 03-3291-8221 FAX 03-3291-8223 <https://catalogue.books-yagi.co.jp/> <mailto:kosyo@books-yagi.co.jp>